

〔法学新報〕第十四卷十三（一六七）号

明治三十七年十二月十日

○東京法学院大学記事

○語学会 予ねて英語茶話会の名に於て催し来りしを今回語学会と改め其第一回を本月四日午前八時より同大学大講堂に於て開催せり当日は学生染谷清、姫田廉三両氏の対話田村悠一氏のリーテング明澤泰治阿部彌一郎氏のデクラメーションあり次て永原庸太郎氏は錫製の兵士に寄せて耐忍を誨へし伽嘶を為し永見源藏氏は青年に対する忠言を述へ小俣房吉、満藤政太郎、大松重三氏の間に父か其愛児に對し開發的に五官の説明を為す対話あり澤井鍾之助氏は一彫刻家か精氣を込め彫りし像か生を得しと云ふ伊太利古諺を語り植月穩氏日露戦争の目的を題として其目的及主義を述へ田代周三郎氏はタータネルス海峡の國際法上に於ける地位を論し木原秀造氏は崇高雄大の詩篇チャルド、ハルルドの一節中「郷を去れ」の詩を吟し次てシヤタツク氏は快弁を揮ひて英語研究の方法に關し種種の注意を懇切に示され廣井講師は当日学生の英語を批評し尚ほ將來の注意を与へられ次は新に帰朝せられたる瀨下清通氏登壇し米國に於ける弁護士の状況を日本と比較して説明せられ終に英詩人野口米次郎氏は文学及思想其他社会上に於ける欧米と我邦との差異を説示

し邦人の反省を求めて拍手喝采聲裡に降壇せられ閉会を告げしは正午頃なりし因に当日は傍聴者實に数百名の多きに達しさしもの広き講堂も立錐の余地なきに至れり

○討論会 十二月五日午後一時より岡田法学博士の出題に係る「甲某溺死せんとす乙某船を出し之を救はんとして既に甲を隔つる一二尺の個所まで接近したるに丙某乙の救助を妨害し甲死亡せり、丙の処分如何」との論題に付き討論会を開き当日の審判者岡田博士を始め一同着席審判者の指揮に従ひ有罪無罪の両論者交々壇上に立ち孰れも懸河快弁を振ひ縦横論駁して頗る壯觀を呈したりか登壇二十余名にして早や予定の時刻に達したれば博士は最も簡明に各論者の所説を批評せられて後其宿論たる有罪説を詳細に説示せられ散会を告げたるは午後六時なりし当日討論者中優等者として選拔せられたるは左の如し

- 一等賞 三年生 生田清三郎
- 二年生 芳賀喬一
- 三年生 神甲 齋策
- 二年生 内田茂七
- 三年生 木村治朗
- 一等賞 一年生 松本六平